

作家、芸術家、芸術思想家としての安部公房
『安部公房全集』第三十巻(最終巻)刊行に際して
**Abe Kôbô, writer, artist and art critic – A short account of the essential facts on the occasion of the
publication of the final volume of his *Complete Works* -**

ジュリー・ブロック

Julie Brock

造形工学部門

Department of Architecture and Design

(2011年7月26日原稿受理、2012年3月7日採用決定)

本論は2009年に出版が完了した『安部公房全集』（新潮社）のもつ意義を提示するものである。この全集には近年発見されたばかりの作家の書簡や、初公開となる対談録や創作ノートが新たに収録されているほか、全ての作品・資料が目録化されており、様々な方向からの参照に耐えうるよう綿密に編集されている。さらに制作者たちは安部公房ならではの実験性・遊び心を取り込むことも忘れていない。例えば近藤一弥氏による装丁は視覚的なものに対する作家の愛を見事に表現しているし、実子の安部ねり氏による伝記は作家の実生活での様子をユーモラスに描き出している。加えて特筆すべきは、作家自らの肉声による作品解説や、写真作品が附属のCD-Rに収録されていることである。安部公房は自身の表現のありよう全体に絶えず先鋭的な思索を巡らせた芸術思想家であった。この全集版と向きあうことで読者は安部公房の業績の意義を再確認することになるだろう。

検索キーワード：安部公房、禅宗、近藤一弥、安部ねり、近代日本文学

The aim of this article is to give due credit to the value of Abe Kôbô's works on the occasion of the publication of the final volume of his *Complete Works* (vol. 30, Ed. Shinchôsha, 2009). As well as Abe Kôbô's correspondence with great writers such as Noma Hiroshi and Haniya Yutaka, and poetry documents and interviews, this work contains an exhaustive and very well presented bibliography. The very design of the work, by Mr. Kondô Kazuya, recalls Abe Kôbô's extremely inventive and innovative character. In the biography, by Mrs. Abe Neri, Abe Kôbô's daughter, we find a very rich and objective recounting of the author's life, yet one which is at the same time full of humour and tenderness. Additionally, a supplement is offered in the form of a CD in which we find the "prefaces" (*kaisetsu*) of his works. Abe Kôbô's voice may be heard, his photos seen, and his theatrical activities followed. Thanks to the form and content of these *Complete Works*, the reader may appreciate the astonishing diversity of Abe Kôbô's talents, and reflect once more on the potentiality of the meaning and beauties that are there to be revealed in such a varied work.

Key-words: Abe Kôbô, complete works, Kondô Kazuya, Abe Neri, contemporary Japanese literature.

近藤一弥氏の手によるこのデザインは実に斬新なものだ。各巻は厚紙の箱に収められ、そこに開けられた長方形の小さな窓に、タイトルが刻印されたアルミニウムのプレートが顔を覗かせる。本を抜き出すとサテン張りの表紙が現れ、一見してこの書物がある種の工芸品として作られていることがわかる。そしてケースの小窓からは、箱の内側に印刷されたモノクロ写真を覗き込む仕組みになっている。それらは安部公房が一人で、あるいは友人たちとともに写っている写真である。こうしたグラフィックなデザイン構成は、安部公房の最も有名な作品の一つである『箱男』を連想させるものだ。一方表紙裏と見返しの間にも、見開きの形で一枚の写真が見られるが、こちらは安部公房自身の写真作品である。

1989年12月、私が過去に一度だけ安部公房に会ったこの時、彼は最後に次のように話した。「皆は私を作家だと思っていますが、本当は私は写真家として認められたかったです」。彼の写真家としての才能は、デザイナー近藤一弥氏の素晴らしい装丁によって余すところなく表現されている。

さて、この全集はドナルド・キーン氏の監修になるもので、研究にも役立つように構想されている。非常な厳密さと細心の注意をもって仕上げられており、将来の安部公房の作品研究にとって必要不可欠な資料となることは疑う余地がない。

本巻の魅力は、表裏両方の表紙がそれぞれ独立して立っているところにある。右開きの奉文は縦書きで組版され、従来の安部公房全集の本編と同じである、左開くと横組の版面で索引、全巻目次、作品目録などの研究用資料が続き、このように内容を明確に分けている。これは本巻で始めて採用された形式である。

構成に目を向けると、本編は「補遺 II 1947.9-1976.4」と題し183頁から成っており、特にここには安部公房を文壇に紹介した埴谷雄高宛ての、近年発見された19通の手紙、野間宏宛の8通の手紙その他の書簡、エッセイ、談話、映画「他人の顔」（勅使河原宏監督作品、1966年）のシナリオ、作品ノート等を収録している。

そして資料編は合計682頁に及ぶ。そのうち約600頁は文献リストであり、前半は安部公房の作品一覧、後半は参考文献に充てられ、終盤に安部公房伝記および年譜が収録されている。

安部公房の作品書誌では、全集に収められた作品を五十音順に並べた作品名索引が初めに用意され、これだけでも延べ33頁に及ぶ。彼の創作人生を伺わせる圧倒的なものである。そこに巻別の内容を年月日順に整理した43頁の全集総目次が続く。

次ぐ作品目録では、2008年6月までに確認された詩、小説、戯曲、映画シナリオ、テレビ・ラジオドラマ、評論・エッセイ、講演・講義、インタビュー、対談・座談会・談話、書簡、創作メモ、絵画、写真など、全集に収録されなかったものを含む安部公房の全作品について、製作時期や発表媒体や掲載情報を約100頁に渡り網羅している。談話記事目録に関しては、最後にまとめて記載されており、これらの目録の良さは、出版および執筆年代に従って編成され、各々に収録巻と頁番号が付されていることである。

そこから、著書目録と放送・上演・上映目録（計180頁）に移るが、特筆すべきは翻訳された作品の目録の頁数である。代表作の一つ「砂の女」だけを取り上げても40カ国語、再訳を含めると

54回の翻訳がなされており、翻訳作品のリストが30頁に及ぶことを強く裏付けている。

ここでようやく参考文献目録へ入り、目録は最終となる。桑原真臣氏の編集によるこの目録は単行本、雑誌特集、新聞・雑誌・パンフレット他の三種類に分類されており、安部公房に関する論文、作品評、書評、劇評、解説等が発表・掲載年月日順に紹介されているが、200余頁という膨大な量に加え、その綿密さには驚かされるばかりか編集者の並々ならぬ努力と苦労が偲ばれる。

ところで、今回私が注目した「伝記」は、二重の意味で興味深いものである。なぜなら、一つには今日に至るまで日本においてさえも安部公房の完全な伝記と言えるものが存在しなかったからであり、もう一つにはこの伝記が作家の娘である安部ねり氏によって書かれたものだからである。1867年以降の安部家の家族史、安部公房の出生状況、満州での少年時代、東京大学在籍時代、作家としてのデビュー、そして造形芸術の才能に恵まれ安部公房の仕事にも大きな影響を与えた真知子との結婚などを安部ねり氏は客観的で距離を置いた文体で追って行く。死に至るまでの作家の仕事と人生を約20頁にまとめたこの伝記は、非常に読みやすく、まとまった形で数多くの逸話や貴重な情報を与えてくれるものである。

最後に添えられた2頁の謝辞において、安部ねり氏はこの全集の実現に協力した全ての人への感謝の意を表している。かくも豊かな文学的遺産を惜しみなく後世に残してくださったことに對し、安部公房作品の熱心な一読者として、安部ねり氏に私は心からの感謝の意を捧げたいと思う。

謝辞の最後の数行は、娘から父への感謝の気持ちが表されており感動的な印象を残す。この部分は美しく、ユーモアと繊細さにあふれる文章で綴られている。安部ねり氏は伝記の中で最も困難を感じた部分は父親と暮らしていた20年分であったと書いているが、当時のことを思い出す作業を通して、氏は少女時代の、それまで気に留めなかった些細な事柄を思い起こす。氏によれば、彼女の父は文学作品を読むように強制したことは一度もなかったというが、その一方で父親としての優しい気遣いを示すことも忘れなかった。娘がSFが好きだということに気づくと、彼は子供部屋へと続く本棚に何百冊というSFの本を並べた。ある日彼女は父が好きな詩人であった石川啄木の書物がさりげなく置かれているのを見つける。しばらく気に留めずそのままにしておく、数日後にはその本が本棚のより目立つところに場所を移され、ついにはいやでも目に付くように部屋の入り口のすぐ横に置かれていたという。このように軽妙なタッチで筆者の父親がこっそりと示した心遣いが描かれており、読者はその行間に安部ねり氏が全集を通して見せている父に対する優しさと愛情を感じることができるだろう。

日本での通例に従いこの配本にも付録の小冊子が付いているが、これらの小冊子は「贗月報」と題され、最終巻のそれは著名な文芸評論家である三浦雅士氏が執筆している。三浦氏は安部公房の作品を戦後思想の流れの中に位置づけており、彼が出発点とみなす詩作品を始めとして、作家の変遷を思想的観点からたどっていく。作者の自費で出版されて以来、安部公房の詩作品が再び日の目を見るのはこの全集が最初である。詩作品は主に二つの詩集から成り、そのうちの一つである『無名詩集』の方がより知られている。三浦氏は、作品の表題を並べるだけで、作家がある同一の主題に魅了され、その主題がいかに展開していったかが分かると言い、この『無名詩集』という表題に對し、断り書きを付け加えている。それは、一般に考えられているように「無題の詩」のことでは

なく、「名称すなわち言葉を剥ぎとられた世界」を歌った詩集であるという主張である。

安部公房の詩作品をフランス語に翻訳し研究した者として、私はこの主張に全面的に賛同したい。同時に私は初期作品へのリルケの影響の指摘にも非常に関心を覚えた。以後、あらゆる作品を通して垣間見る事の出来るリルケの影響については議論の余地があるにせよ、この三浦氏の指摘はこれからの安部公房作品研究の出発点になると思われる。そして、安部公房の言語の問題への関わりについてのこの論文は避けて通ることはできないであろう。

終わりに、今回の配本に付された非の打ち所のない CD-ROM についても語っておかなくてはならない。この CD-ROM は本冊と同じサイズのケースに収められている。このケースを開くと見開きで4枚のフロッピーディスクの写真が印刷されており、それらのディスクのラベルには、安部公房自身の手でそこに収められた作品のタイトルが書き込まれている。安部公房が日本で初めてフロッピーディスクを用いて入稿した人物であることを知っていれば、思わずにやりとせずにはいられない気の利かせ方である。私の手元にある新聞のコピーを見てみよう。1985年3月27日の新聞 Liberation でコリーヌ・ブレ氏は安部公房の逸話を掲載している。「1984年の夏の終わり、出版社が大きな鞆を抱えて『方舟さくら丸』の原稿を取りに来たんだが、分厚い原稿用紙の束のやり取りを習慣にしていた担当者に自分がフロッピーディスクを1枚手渡すと、彼は非常に驚いた」と。この記事のタイトルは「安部公房の最新のフロッピーディスク」であるが、敢て「新作」としなかったこの記事は、彼の肉筆がディスクのラベルにのみ存在していたことをユーモラスに伝えている。CD-ROM を取り出したとき、かの『方舟さくら丸』のディスクを目にし、25年間片時も頭を離れることのなかった「安部公房のフロッピー」に初めて出会えた喜びと感動を抑えられなかった。常に最新の技術に関心をもち続けた彼は、目録が今 CD という現代の記録媒体に収録されたことを喜んでいるに違いない。

CD-ROM には『安部公房全集 1924.03-1993.01』の全集総目次、全ての贗月報、初版本ジャケット、書籍箱の中の写真、裏表紙の写真、フォトギャラリー、新潮社テレホンサービスの作品紹介が収録されている。

テレホンサービスとは、新潮社が当時の読者のために行っていた『自作を語る』と題された短いメッセージで、導入のアナウンスと音楽に続いて作家が新刊書についての紹介とコメントを行うものである。この CD-ROM には、『ウェー』(1975)、『密会』(1977)、『方舟さくら丸』(1984)、『カンガルー・ノート』(1991)の出版に際しての作者のメッセージが収められている。そこには例えば『人間そっくり』という作品のタイトルの元になった聞き違いにまつわる楽しいエピソードなど、安部公房の文学についての興味深いコメントが作者自身の肉声で紹介されている。

「解答がないことを承知で問い続けるということだけが唯一の解答ではないか」と安部公房は『方舟さくら丸』の紹介の中で述べている。また『カンガルー・ノート』の紹介では、この作品が「実生活では絶対に起こりえない」状況である「入り口も出口もない迷路の旅」を描いたもの、「体験としての懐かしさではなく、懐かしさのイメージ」だと語っている。とりわけ、作家はここで自ら作品解釈の鍵となることがらを語ってくれているのである。

安部公房作品の核心に触れる問題の全てが、文章、音声、イメージの形でこの一枚の CD-ROM の中に凝縮されている。それは1996年にコロンビア大学のドナルド・キーン日本研究センターで行わ

れたシンポジウムで試みられたように、安部公房を研究するならば作品の全ての面を検討する必要があることを示すものである。この全集の最大の功績は、安部公房が作家であるだけでなく、芸術家であり芸術思想家でもあったことを証明したことであるように私には思えてならない。

(2009年4月1日 翻訳:松村博史)